

クサボケ

牧 幸 男

厳しい冬を過ごしてきた人々は、春の訪れは何よりも楽しみである。福島県田村郡三春町の町名は、春になると梅、桃、桜が一齐に咲きだすので三春にしたと聞いたことがある。春を待ちわびる気持ちがよく現されている町名である。同じような気候の長野県に住む私達も、春を本当に待ち遠しく思っている。雪に被われ遠くに見えていた山々も、木々の芽の膨らむと共に何となく近づいてくる感じがする。



この季節に野山を歩いていると、枯れ草の中に、クサボケの赤い花によく出会う。地を這うように枝を伸ばしているのが、近づかないと気がつかない植物である。しかし、花の時期になると、精いっぱい伸ばした枝には、葉が未だ芽を出さないうちに、華麗で梅に似た赤い花を盛り上がるように咲きだす。その場所だけが春本番といった雰囲気をかもし出してくれる。私の生家の中庭にはクサボケが植えてあった。父は「ボケの木があると、その家では惚け人間がでるから。」と言い、切った方が良く毎年刈り上げていた。しかし、絶えることなく毎年見事な花を付けていたので、丈夫な木という印象が私にはある。父が、根こそぎ掘り出すことはしなかったのは、恐らく毎年花を見るのを楽しみにしていたのかもしれない。

父のような縁起を口にする人もなくなり、最近是一般の花木より花付が良いので、鉢植えや花壇の刈込等に用途が広がっている。クサボケはわが国では古くから栽培され、かつ、自然の変種と相まって多くの園芸種が生まれている。わが国特産のクサボケは、1784年にスウェーデンの植物学者カール・ペーテル・ツンベリー（1743～1828）により初めてヨーロッパに紹介された。以来、花の少ない時期に美しい花を咲かせることから人気が出て、ヨーロッパでは交配が進み多くの新品種が生まれている。

クサボケは、本州の中南部から九州にかけての山野に普通に生えるバラ科の落葉小型低木である。茎の下部は横に伏し、高さ30cm内外、とげ状の小枝があり、葉は倒卵形、長さ2.5～5cm、巾1～1.7cmぐらいで円筒、無毛、春の花は前年枝以上の短枝に多数つき、早春に葉よりも先に花を開く。花の色は緋色から黄赤色までと種類が多いが、時には白花もある。白花のボケを、シロバナクサボケと呼ぶことがある。花に雄花と雌花があり、雄花の下位子房はやせ、雌花は肥大する。時には、同じ株に雄花と雌花が付いたり、雌花しか咲かない株もある。クサボケの花については、小野蘭山(1729～1810)は『本草綱目啓蒙』（1803）で「雌雄異幹の如く説けり」と記述し、昔から雄花と雌花があることが分かっていた。更に、飯沼慾齋（1782～1865）が著わした『草木図説・木部』（1865）には「全花と不全花の二つを具するものの如し。」の表現も見ることができる。

秋、花の数ほど実はないが、果面は多少でこぼこした球形で淡緑色、径2～5cmと小さい実を結ぶ。8～9月黄熟するが、木化して固くとても食べることはできない。皮は少し粘らず、ほのかなリンゴに似た香がするが、味は酸味が強い。

類似植物に中国渡来のボケ（*Chaenomeles spenciosa*）がある。このボケは中国の奥地の陝西省、四川省、雲南省からビルマ北東部に自生する植物で、古くから薬用植物として栽培され、薬用に利用し貼梗木瓜、鉄脚海棠、報春花と呼ばれていた。このボケは高さが2m程の成長し、果実も大型なので区別は容易である。わが国への渡来は『延喜式』（905～927）には「御杖木瓜三束」の記述やこれと同等時代に編纂された『倭名類聚抄』（931～938）にボケの記述があり、『本草和名』（918編纂）には「木瓜実煨查大にして黄、查子、渋し、

木瓜一名^ほ楸 和名毛介」とあるので、10世紀初頭に渡来したのであろう。

ボケ類は自家不稔性が強い反面、他品種とよく交雑する性質があるので、実生すると親と違ったものが生じやすい。現在わが国で知られている園芸品種は約80種と言われているが、クサボケ系かボケ系か区別ができなくなっている。この植物を觀賞用に栽培するようになったのは、江戸中期からであるが、園芸用の目的に大発展したのは明治、大正時代になってからである。主な品種改良でよく知られているのが長壽梅（花は朱赤色で四季咲）、寒木瓜（成長が早く花は一重大輪）、龍頭（春咲種で花は一重大型）がある。このボケについて、夏目漱石は『草枕』の中で「木瓜は面白い花である。枝は頑固で曲がったことがない。そんなら真直ぐかとふと決して真直ぐでもない。只真直ぐな短い枝がある角度で衝突して斜めに構えつつ全体ができあがっている。そこえ紅だか白だか要領をえぬ花が安閑として咲く。柔らかい葉さえちらちらつける。評して見ると木瓜は花の中で愚かにして悟ったものであろう。世間には掛出を守るといふ人がある。この人が来世に生まれ変わると、屹度、木瓜になる。余も木瓜になりたい。」とボケのことを紹介しているが、なるほどと思わざるをえない表現であろう。

クサボケは古くから薬用に使われ、親しまれた植物であるが、詩歌に詠まれるようになるのは、明治以降である。

野に這ひて 草木瓜の花 あかく咲く 昔のままの ふるさとの道 峯村国一
土近く までひしひしと 木瓜の花 高兵虚子

植物名について、牧野富太郎博士は「日本名は草木瓜、ボケに似て小型の低木なのでクサと名づけた、地梨は地面ぎわにナシのような実がなるからである。漢名は一般に^{しどみ}楸子が用いられているが、これは誤りであろう。」と述べている。別名に^{やぼ}野木瓜、^け小木瓜、^{こきつめ}木桃、^{もけ}毛介等がある。その他、果実の酸味から酸梨の漢字を当てることもある。学名は *Chaenomeles japonica* で、属名は chaino（開ける）+melon（リンゴ）即ち裂けたリンゴの意で、熟した果実に裂け目ができる意味である。種小名は日本に産する植物を示している。

薬用は、果実を青みのある頃に採取、横切り乾燥したものを生薬名「和木瓜」と呼び、^{むくみ}覚乱や暑気当に、脚気や腎臓病などからくる浮腫の利尿薬として用いる。熟した果実を薬用酒として、疲労回復にも利用する。また、砂糖と焼酎に漬けてボケ酒を造り、滋養強壮、不老長寿の薬用酒に利用していた。

食用には、青味を塩漬けにしたり、黄色果実を砂糖漬けにすると歯ざわりも良くおいしい。果実酒（クサボケ酒）にすると香りもよく人気がある。更に、クサボケの果実の煎十に砂糖と生薑を入れてたものを、身体が温まるので冬の飲み物としていた。

花言葉は「一目惚れ」「平凡」「早熟」である。



ボケ類の花の写真（赤八重）



ボケ類の花の写真（普入り）



ボケ類の花の写真（白色）

